

妻と孫を  
相棒に

連載



地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫

# 「ジジ」の単独猪猟

神奈川県 田宮 治

## ② リベンジなるか

● おかしいなあ？

翌朝、目を覚ますと体中が痛い。昨日イノシシを逃したのには残念でならないが、犬の傷の手当てをしながら、最後までクマ号一頭で頑張れたのは、きっとイノシシも動けなかったに違いないと思った。

ならば、よし。「体が痛い」なんて言っている場合ではない。意を決して、こんなときこそ頼りになる追跡No.1のアニー号を先犬に、ラガー犬のアカ号と鳥犬のミス号、それにアカの子で一歳のケン号を連れ、一人で出かけることにした。

昼頃になっていたが、山の現場に着いた。松の大木の根元がまるで小さな土俵である。一面雪が踏みしめられ、おびただしい血が飛び散り、土が二〇〜三〇cmも掘られている。周りを見

ると、さらに驚いたことに、上から小峰伝いに大小四つも土俵があり、大きいものは直径二〜三mもある。

周りの小木が食いちぎられ、その攻防の凄まじさが窺われた。やっと犬達の尻尾しか見えなかった理由がわかった。イノシシは、土俵に陣取っていたので見えなかったのである。犬達は、どんなに私を待っていたことだろうかと、しばし考えていた。

すると、アニーが甲高い香り鳴きで走り去って行った。全犬アニーに続く。五分もしないうちに、前の大山の八合目辺りでアニーには珍しい「止め鳴き」のような声が出た。続いてミス達も三〜四回止め鳴きを繰り返した。

「止めたな。よし、今度こそ」と、その方向に走り出す。しかし、先ほどの三〜四回の鳴き声を最後に何の音もなく、無線さえ入らなくなってしまった。今日は一人なので、車との連絡も取れない。いつもなら、「出たぞ淳ノ！行き先をどうぞ」と聞けば、「聞こえないよ」とか、「裏に越えたようだよ」と、イノシシの方向を知ることができて助

かるのだが……

そんなことを考えながら、犬達の後を追って上り坂にさしかかると、まるでビヤダルのような体を雪に浸けながらイノシシが登っているのが見えた。コケでは登り、二mも滑り落ちてまた登る。ヨタヨタ登っているのが手にとるようにわかる。

「おかしいな。こんな半矢状態のときは、アニーを先犬にする」と、勝負が早くつくのになあなどと思いながらも一歩、また一歩と、しばらく後をつけるが、初めてのうえに、とても急な大山なので、山越えで追うのはやめ、越えたと考えられる山の裏を、昨日入った沢の道から探すことにして車に戻った。

橋までの道でも、沢の小道でも無線に入らず、犬達の足跡も見えない。とうとう二時間もかけて、先ほど鳴き声をした所を越えれば必ず来るはずだと思われ、沢の一番奥まで行ったが、やはり跡はなかった。シーバーも入らない。

大峰を走り、その奥に追って行ったとすると、もはや諦める以外にない。疲れた足を引きずりながら車に戻ると、全犬が待

っていたように元気に集まって来た。

「おかしいなあ。狩人の入った跡もないし、きつくて後を追うべきだったか」と思いながらも、犬達に「よし、来い来い。駄目だったか」と声をかけ、車に乗せようとすると、アニーとミスが今私が出て来た道を奥へ行こうとするではないか。

「アニー、ミス、来い来い」と呼んでも、なかなか戻らず、少し戻ってもまた奥へ行こうとする。「もういい、来い」と、二頭を呼び戻して車に乗せた。犬達を一頭ずつ調べたが、ケガも変わった様子もないので、ひとまず安心する。

何か割り切れない気持ちだが、犬も帰って来たことだし、疲れきったこの体では、やはり諦めるよりほかはない。心残りですが、方がないが、家路に着くことにした。

翌朝、食事を与えに犬舎に行くと、昨日引いた全犬がイノシシの毛ばかりの汚れたウンチ、ウンチをしていた。やっとな昨日の犬達の不思議な行動が理解できた。

ミスもアカも、イノシシが死

ぬと鳴かない。アニーも同じだ。アニーが香り鳴きから追い鳴きに変わず、「ワンワン」と止め鳴きのような声を上げたのも、他の犬の止め鳴きがすぐになくなってしまったのも、四頭の犬がイノシシが死ぬ前に咬み込み、それによってイノシシがすぐに死んだのであろう。

すぐに鳴き声がなくなり、無線が入らなかつたのは、あの小峰を越えた沢に落としたか、小峰のすぐ裏だったのだろう。私は、一人で苦笑いした。そこまですり解けたが、あいにくこの日は大雨であつた。

焦ることはない。犬も大ケガではないが、傷が治るのに一週間には必要だ。今度の土曜日くらいに今年最後の猟に出かけ、イノシシの雪漬けを持ち帰るのも悪くはないだろうと、呑気に構えることにした。

### ●獲らぬタヌキの何とやら

「今日は、冷蔵庫の大猪を引き出すだけだから」と、冗談を言いながら、十時頃に問題の沢口に着いた。孫と妻に「お預けのイノシシを持って帰るから」と告げ、いつもの幅広の引き綱

を背に山を登る。

「あの裏だな」と、アニー達が鳴いた八合目を目標に、その下の沢から念には念を入れて調べたが、……ない。「ならば、上か」と見上げると、急斜面である。そのとき、上のほうで犬達が鳴き出した。かなり上の、やはり小峰の裏だ。

やっと思つてたか。犬達の鳴き声は止め鳴きではなく、シロが獲物を獲つたときに「俺のものだ」と鳴く声に、他の犬達が反応しているようだ。私も近づいた。だが、これはいつたいどうしたことだ？ 広がった台地で、長いひも状の物を引き合っているではないか。

さらに、傍に行つて驚いた。それはイノシシの皮であり、かなり大物のものだ。頭は付いているが、内臓はおろか、肉さえ全くない。しかし、手と足と骨は付いており、手足の爪もきつちり付いている。頭と足の爪などから見ると、一〇〇〜一二〇kgはありそうな大物だった。

驚くやらガツカリするやらで、ただ果然と犬達の食べる様子を見ながら、「あああ、こんなこともありかよ」と独り言。それ

でも、犬達に好きなだけ食べさせるのは良いことではないので、「よし、やめっ」と、犬達から皮を取り上げ、力を振り絞ってナラの木の枝にやっとのことで引っかけた。今度は犬達が「そんなのありかよ」とでも言いたげに、なかなか離れない。

先犬のクマとブルに引き綱を付けて山を下りることにした。

苦労して一週間追い続けた成果が「大猪の皮獲り」だったとは。車で待っていた孫と妻に、このことをおどけて話すと、笑い飛ばされてしまった。私も苦笑いである。

全犬を車に乗せ、もう狩りをする元気もないので、妻と「あんな大猪を殺すなんて、普通は考えられないよ」と、改めて愛犬達の頑張りに感心していると下のほうから松土さんが車で上って来た。

私が先週出会った日のこと、今日までのことを話すと、納得したように「あの日、すごく鳴っていたものなあ。あの峰で止めているのはすぐわかったよ。駆けつけて撃ってやろうと思っただけど、仲間に悪いのでマチを離れられなかった」と言う。な

お松土さんは、クマとブルの無線番号まで知っていた。

「ワンワン、ギイーギイー、あんなに長く止めているのに、なぜ撃たないのかと思っていたよ」と言いながら、この沢は小峰が多く、無線が届かないのもお見通しであった。さらに、「それにしてもすごい犬達だなあ」と誉めてくれ、驚いている様子であった。

この時期の牡のイノシシは、痩せていて逃げ足が速く、攻撃力も相当なもので、改めて犬達の能力に頭が下がった。私は、愛犬達がベテランハンターに認められたことがうれしくて、疲れも失敗も忘れてしまった。

得てして「猟」というものは、結果オーライで、獲れたときはすべての巡り合わせがよく、あまり教訓にはならないような気がする。それよりも大切だと思えたのは、今回の「イノシシの皮獲り」が与えてくれたいくつかの教訓である。

まず一日目に、いつものように愛犬達を信じて、置いていかれた奈智と千壽を引き連れ、辛くても大山を越えた犬達の後を追う根性が私にあったなら、そ

の日のうちにイノシシを撃ち獲ることができたはずである。

また二日目も、アニー達の止め鳴きを「おかしいな」と思いながら、前日の疲れからやはり大山に登る努力を怠っていた。このように、「獲れる」「獲れない」は紙一重で、一つ間違えば大切な愛犬の命を落としたり、取り返しつかない事故にもなりかねないのである。そのような考えたとき、わが命が無事であったことと、あれだけの攻防戦にもかかわらず、愛犬達のケガが大したことがなかったこと

が何よりで、今までにない体験ではあったが、満足せねばならない。

ただ、一歩間違えば一大事になることも事実である。一日目、暗くなるのに私が帰って来ず、おまけに無線は通じない。こんなときのために教えてあったように、妻は適切な行動をとってくれた。心配した妻は、携帯電話が通じる場所まで車を飛ばし、新潟の満兄に電話を入れ、指示をおおいだという。

そのとき兄は、「治のことだから大丈夫だ。きつと深追いし



満兄と獲ったイノシシ(110kg)。箱の中はミス号



新潟でのクマ猟の満兄

ているとだ。天気も良いようだし、あと一時待ってやれ。落ち着いて元の場所で待つように。あと二時待っても帰らなかつたら、また電話くれ」と言つたそ  
うである。

兄は、小さい頃から兄に付いて狩猟を覚えた私の気持ちも行動も見抜き、また信じてくれた。そんな兄に感謝し、温泉から電話を入れたのは言うまでもない。なお、これからは、愛犬達に信頼される主人となつて、今回の失敗を償いたいと思つている。

### ●後継者を育てる

残念なことであるが、今や狩猟者は老人ばかりである。若い狩人の育成は、われら狩人の義務のような気がする。なぜ狩人になる若者がいないのか。

原因は、苦勞ばかりで楽しくないから。規則が厳しく、制約が多いから。自然が失われ、獲物が少なくなつたから等々、若者にとって狩猟は、あまり良いスポーツでも趣味でもなさそうである。

小学校一年生の孫に「ジジ、どうしてイノシシを殺すの？」と聞かれるが、この孫の疑問に

対する明解な答を出すのは実に難しい。このことを考えても、現在の狩猟は若者が飛びつきにくい世界なのであろう。

私達が猟の道に入ったのは父や兄、あるいは親しい人に付いてその人達の猟を見ながら、狩猟の楽しさや面白さが自然に身に付いていったような気がする。そのように、「狩猟とは、楽しく面白いものである」ということを、自然に体で覚えるのが一番であると思う。

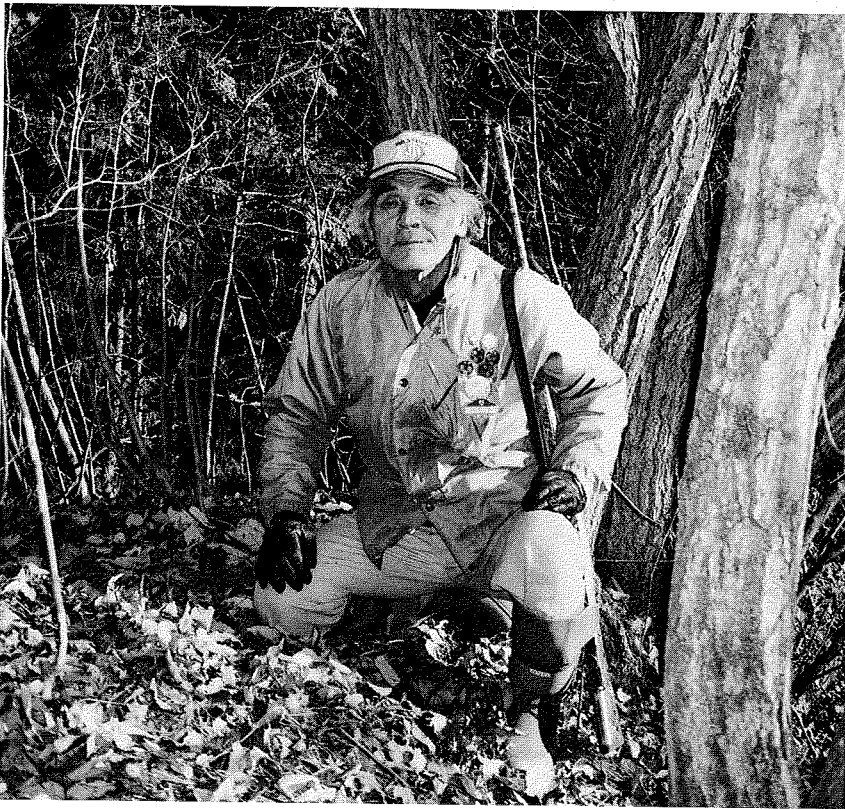
私も小学三年生頃から、父や兄達の後を追つて、怒られながらも銃の使い方、犬の引き方などをごくごく自然に覚えた。兄は昭和三年生まれで、私の人生の節々に方向を与えてくれた恩人であり、何でも相談できる人である。狩猟をこよなく愛し、「生涯現役」を地で行く私の手本である。

長男は昨年、八八歳を機に狩猟をやめたが、地元猟友会の会長を何期も務め、盛期には年に七、八頭もクマを獲り、新潟日報で報じられたりしていた。また満兄は、毎年私の所に来て大猪を撃ち獲っている。その兄は、酒が入ると「治、親父は偉かつ

たぞ。だって、そうだろう…。子供を皆狩人にしたものなあ」と、決まってこう言う。

私は、教育者であった兄の口から「親父は、二人もの子供をあんな田舎で、あの大変な時

代に高校にやり、何人かは大学まで出してくれたんだ」と、一度くらいは感謝の言葉でも出ると思っていたが、上機嫌になればまた「狩人：」の話である。ちなみに満兄は、長きにわた



最高の獵人、満兄。群馬県下仁田にてクマ獵で

って校長を務めていた。定年後も射撃に狩猟にと、まだまだ私など及ぶところではない。今年（十五年度獵期）も獵に来てくれ「長兄を越すぞ」と、高らかに宣言して帰った。

その兄も、やはり後継者不足を案じている。地元新潟で指導員をしているので、誰よりそのことを痛感しているのだと思う。地元で兄を知らないハンターはいない。教え子も大勢ハンターになっており、私がクマ獵に行くとき、「先生の弟さんか？」と言って欲待してくれる。

ただ、そんな兄にも困ったことが二つある。一つは妻を五九歳で亡くしたこと、もう一つは、今でも一升酒を呑んでしまうことである。

以前から酒好きだったが、妻の死を境に益々酒量が増え、一〇年ほど前についに大腸癌の手術を受けた。しかし、その大病にも根性で打ち勝ったと思っっているようだが、私は何とか酒量を減らせないものか、そして一年でも長く一緒に獵をしたいものだ、と心から願っている。

今年の獵期の終わった二月末、日さんという若い人から「子犬

大好評、発売中！  
エンライフル  
**空銃銃獵百科** 山口 進著  
税・送料込み価格 一四、一〇〇円  
株狩獵界社

を護ってほしい」との連絡があったので、色々聞いてみると、彼は私が生まれた村の人で、兄の教え子でもあり、甥っ子の獵友達とのことだった。なお、年間五、六頭はクマを獲るといふ。「今、子犬はいないけど、生まれたら送るよ」と言うのと、とても喜んでいた。その約束の子犬がやっつと二胎、七月十五日頃に生まれるのでホッとしている。

私が生まれ育った新潟県最北部の町は、山形との県境で、昨年「秋田マタギ」と一緒に紹介されたことのある「山熊田村」を含めた集村の町で、「熊祭り」の行事などでわかるように、クマは多いがシカやイノシシは全く棲息しないので、獲る楽しみも知らない。

私は、この地方のハンターの方々にも何とか「猪獵」の楽しさを知ってもらいたい…そんなことを考えている。なお、弟の私が言うのもおかしいが、満兄は最高の狩人である。（つづく）